

J. PIAGET

Geant de la psychologie du xx^e siècle ,fondateur de l'épistémologie génétique

3月24日25日 Spring Seminar 2016

第20回春季研修会 会報誌 主催：日本ピアジェ会 後援：株式会社メイト



『学びにおける遊びの役割』

斎藤 法子・・・・・・・・・・ P3

ペタペタシール遊び実践発表について
助言者 大石 富士子・・・・・・・・ P6

べたべたシールあそび実践発表・・・・・・ P7～P10

師勝はなの樹幼稚園・あおば幼稚園
遊々保育園・鴻池学園幼稚園

学びにおける遊びの役割

カリフォルニア州立大学院
名誉教授 斎藤 法子



三種類の知識（学び）

知識には、物質の中に存在するもの（外面的知識）と、物質の中ではなく人の頭の中の関係性によって生み出されるもの（内面的知識）とがあります。

例えば、リンゴの中に種があることは、実際に子どもが経験して知識を得る必要があります。これは物質自体に備わっている知識であり、外面的な知識と呼ばれます。一方、内面的知識とは、知識自体が物質の中にはなく、人が物質を比較したり、関係付けたり、可逆的に思考したりして頭の中の関係性によって生じる知識のことを指します。

これらを踏まえて、学びの上での三種類の知識とは

- ①物質物理知識
 - ②論理・数の知識
 - ③社会【習慣・言葉】の知識
- のことを指します。

これら三つの知識はそれぞれが関わっています。保育活動の際にも安易に一つを取り上げずに、3つの関係性全体で捉えていくようにしていきましょう。以下に詳しくみていきましょう。

②の論理・数の知識は、頭の中の関係性によって成立する知識なので、内面知識の要素が多く含まれています。例えば対象を比較しようとする、その対象の①の物質的な外面知識が前提となります。①の物質物理知識を理解しようとする、人がすでに持っている知識と関係付けて理解していく為に、②の論理・数知識が前提となります。

リンゴを例にしてみますと、リンゴを比較したりする内面知識には、前提として、リンゴには赤いリンゴ・青いリンゴ・種のあるリンゴと様々あることを理解しているリンゴ自体の外面知識が必要です。反対にリンゴ自体の外面知識を理解しようとするには、今迄培った内面知識を使って関係付ける内面的な知識を前提とします。以上のことから、子ども達の保育活動をする時には、常に外面知識と内面知識双方の関係を考えることが大切です。

それでは、リンゴの物質・物理知識をさらに詳しくみていきましょう。まず物質知識ですが、これは【色・甘さ・固さ・重さ・種の数】などです。観察・経験によって理解していく外面的な知識です。物理知識の「なぜリンゴは木から落ちるのか？」「なぜリンゴは水に浮かぶのか？」は、引力・密度を関係付けする②の論理・数知識の内面知識が必要です。常に互いの知識が関わり合っていることがわかります。

それでは、次に、社会の知識を見ていきましょう。これは習慣や言葉の知識のことを指します。例えば「リンゴ」という言葉、これは論理的や数的な関係付けは必要としません。単に言葉「リンゴ」と呼ばれることを意味しているに過ぎません。社会知識は国や文化によって異なる社会からの一方向的な知識です。

しかし、リンゴの種類の一つ、富士リンゴとワシントンリンゴを比較することは、内面的な知識といえます。また、言葉にしても、良い言葉・悪い言葉、礼儀や道徳、これらは頭の中の内面での関係付けや洞察が必要なので、内面的知識の特徴を持っています。3つの知識の関係性をよく理解して保育に活かしていきましょう。

数の知識



ぺたぺたシール遊びでもたくさん出てくる数について考えてみましょう。対象の数を数

えたり、数を読んだり、九九を唱えることは外面知識といえます。これは暗記によって言葉を覚えているだけに留まり、数の理解とは異なります。

一方、暗記ではなく、数の意味を理解することの方がどれほど有益かは容易に想像できます。数の理解を深めるにはどのようにすれば良いか見てみましょう。

- ・仲間集め（集合）
- ・順序の関係（最初・中・最後）
- ・一部と全体の関係
- ・階層分類の関係
- ・可逆の関係

例えば、対象の数を数えることは、外面的と言えませんが対象の数を対応させて、同じか多いかを考えることは数の内面的な側面を考える保育といえます。子ども自身によって頭の中での関係を自発的に築いていけるように保育を構成してみましょう。

学びは自発的思考



さて、大人が言葉で子ども達に教えても、子どもは子どもの論理で理解していきます。先生は言葉で教えたので、先生が思ったように子ども自身も理解している

と勘違いしてしまいます。例えば、子ども達に「先生は何歳だと思おう？」と質問したとしましょう。子どもは「先生は10歳です」と答えたりします。大人が当たり前だと思って考えていることも、実は子どもの世界観では全く異なることは多々あります。

ピアジェは知識の原点は、五感を使って認知する感覚能力と、知性の能力にあると思っています。知性の能力とは、第一に環境に適応する能力です。新しい環境に適応していく素晴らしい能力です。第二に同化、調節、均衡で認識を理解していく能力です。新しいものに会ったとき、過去の知識から問題を解決しようとして認識を広げていく能力です。知性は本質的には自発的な活動です。子どもが自分の思案を考えることが出来る、これこそがピアジェ教育だといえるでしょう。

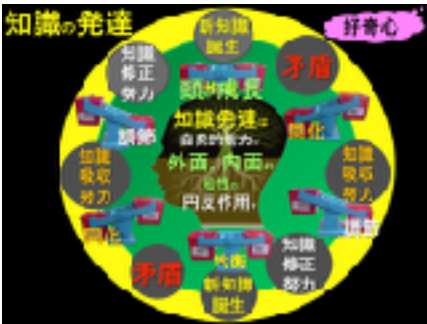
具体的に、どのような活動が自発的で内面的な知性を促進していくのでしょうか。それは、対象 (Object)、と事象 (event)、行動 (Action)の3つの相互作用で豊富な知識の関係付けをして内面的な知性を促進していく活動です。

例えば、子どもが犬を見たとします。「わんわん」犬だ (対象)、犬と遊んで認識を深める (事象)、そして五感を使って鳴き声、感触等を関係付け (行動) ていく。3つの関係で、内面的な知性を促していきます。

次に子どもが猫をみたします。にゃあにゃあ鳴いている。(対象)にゃあにゃあはネコとも言うのよ。(社会知識)犬とどこが違う?舌はざらざらしているね。犬と猫との違いを感覚能力と知性の能力で関係付けていきます。



次に動物園で初めてトラを見たします。あれ、これは犬?ねこ?と矛盾が生まれます。目の前のものを理解しようとします。(同化)そして、過去の知識を使って目の前の事象を理解しようとします。(調節)そして、新たなトラという動物の新たな知識を得て、均衡の状態になり、古い知識を新しい知識で修正していくのです。矛盾を生んで考える機会を持つことは大変重要です。たくさんの疑問・矛盾を土台に下記の円の循環の反応によって認識を深めていきましょう。



円の循環作用

遊びと学びの区別とは?

遊びと学びとは一体何が異なるのでしょうか。ピアジェ博士ははっきりと次のように述べています。遊びは、模倣による記憶だけで、深く考えることがない真似をするに留まることを指します。

遊びでは、対象の調査・探求・検討をすることがありません。このような時、保育者が支援することによって活動に自発的な探究心を付加してあげることが有益です。単に子どもが楽しい、気持ちいいだけで終わっては、知的能力が発達しているとはいえません。上述した3つの関係【対象・事象・行動】を通して、豊かな内面的知識を構成していくことが、学びへとつながっていきます。



左写真は、単なるごっこ遊びでも、保育者が大きさや種類の関係(論理・数の知識)を考えられるように入れ物を整

えるだけで内面的知識を促すことができます。

保育士の役割とは?

教育者に向けたピアジェ博士からの質問があります。それは、「既知の知識を学ぶことができる子を育てるのがあなたの目的ですか?」それとも、「考案して新しいことを試す子を育てるのがあなたの教育の目標ですか?」もし、後者があなたの目的なら、子どもが自発的に五感を使って豊富な内面的知性に従事できる保育をすることです。常に子ども達に動機付け、刺激を与える先生であって下さい。そして、子どもが知識を理解する過程を理解していきましょう。

- ・平凡な保育士は指示をする(外面)
- ・良い保育士は説明する(外面)
- ・優れた保育士は実演する(外面)
- ・偉大な保育士は動機・刺激を与え、思考力を促す。皆で偉大は保育士になりましょう。

第20回春季 ピアジェ研修会ぺたぺたシールあそび教材の実践発表



日本ピアジェ会
研究員 大石 富士子



ピアジェ研修会も20回を迎え、ぺたぺたシールあそび教材の実践発表も各園それぞれに研修を重ねて頂き、実際の保育に役立つ豊富な内容で今回も大変勉強になりました。

導入にもさまざまな方法があり、子ども達が興味を持って楽しく活動していく中で、自ら気付き、考えていく環境を整えて導入されていました。子どもの発達段階や特性をよく理解し子どもならではの発達や行動を受けとめ、認めて、介入していく事の大切さを学ばせて頂きました。

発表時に準備して下さった大型教材の作り方をわかりやすく表示して紹介して下さいました園もあり、また、発表して頂いた単元の研究だけでなく、年長組の子ども達の日常生活の様子を紹介して下さいました園もありました。年少からの教材操作経験が土台となり、年中・年長組の活動へとつながっていき、様々な行動や遊びの中で思考活動を活発に行っている姿が見られ、自立思考を促す保育を実践していく重要性を再認識できました。

園全体で目標を明確にし、全職員で目標の共通理解・共通意識を持ち、具体的に計画立てて、子ども主体とした保育を進めていく姿勢を見習っていきたいと思います。今回も、ご多忙の中、発表にご協力頂きました各園の園長先生はじめ先生方、本当にありがとうございました。これからもどうぞ宜しくお願い致します。



師勝はなの樹幼稚園（愛知県江南市）

発表者：田中 友理恵 加藤 佑里恵

年少編：単元①にじのぶらんこ

目標：同じ色の発見と対応

ねらい：同じ物の色にもいろいろあることを知り、同じ色の仲間を発見し対応する操作で言葉に関係づけていく。



導入①では「何色の花が咲くのかな」をテーマに、花が咲くには何が必要かを話し合い、植木鉢の色（赤・黄・青）に着目した後花の種の色（赤・黄・青）について話し合い、同じ色の物がある事に気付かせました。芽が出て、芽が伸びていく楽しい仕掛けのある大型シアターの教材で興味をひきつけ、植木鉢、種、花と同じ色がある事を発見し、同じ形の物でも違う色の物がある事を確認しました。次に飛んできたちょうちょうの色（赤・黄・青）に気付き、どの花にとまるか色の仲間気付くように導いていました。

導入②では、男の子と女の子のペープサートを出し、それぞれの服の色について話し合った後、靴・帽子を出し、色に注目させ、同じ色を発見して対応できるように操作していきました。「何故そのようにしたのか」をその都度たずね子ども自身の言葉で自分が考え事を伝えるように導いていました。

応用では運動あそびで、ひとりひとりがフープを持ちフープの色に着目しながら、同じ色の別のフープを発見して移動していく活動をし、体を動かしながら遊ぶ中で同じ色の仲間を見つける楽しい遊びを紹介して下さいました。

あおば幼稚園（和歌山県紀の川市）

発表者：宮尾 美季・黒野 公美

年少編：単元③たりないものなあに？

目標：不足を補う。

ねらい：足りないものを補う操作を通して、部分と全体とのつながりを理解します。



導入では、ぶたくんの事を見て気付いた事を発表し、タイヤが足りない事を確認し、補充しなかったらどうなるか、補充すればどうなるかも話し合い、部分と全体のつながりを考えられるように進めてみました。次に公園に出かける設定でブランコに足りないものを発見して補充したり、同様に家や信号の足りない所を発見したり、また修理工場にある物（三輪車・はさみ・時計）の足りない所を発見し、それぞれに何を補充したのかを確認し、話し合いました。

応用では、子ども達が普段使っている身近な物（のり・いす・ジャケット）の足りないものを話し合い、全体をイメージしながら足りないものを各自がクレパスで描いていきました。その後、自分の描いたカードと実物を見比べて確かめました。足りないものを発見した時、「どうして足りないと思ったのか」を常に問いかける事により、部分と全体のつながりが理解できるように導いておられました。また、日常の保育の中から、年長児の「お店やさんごっこ」の活動を映像で発表して頂きました。子ども達が主体となり、話し合ったり品物作りをしたり、実際にお店やさんごっこをしている姿を見せて頂き様々な行事や遊びの中で、思考活動を活発に行っている様子が見られ子どもの発想の素晴らしさを改めて感じさせて頂いた発表となりました。

遊々保育園（岐阜県加茂郡）

発表者：堀田 みなみ

年長編：単元⑩かみしばいづくり

目標：創造性豊かな言語活動

ねらい：今迄学習してきた能力を総合的に働かせて、事物の前後関係をとらえ、筋道を立てて創造的にお話づくりをします。



5才児のこころの発達・道徳性・豊かな言語表現を研究テーマにした保育の取り組みを発表して頂きました。絵本の読み聞かせ合いを子ども達同士で行い、その内容について話し合っていました。4、5人のグループを作り、絵本当番を決め、当番はみんなの前に出て絵本を読む→読み聞かせが終われば本の内容について友達と一緒に話をし、内容を深めたり、その後の展開について意見を交流し合う→交流の後は、チームごとにどんな話し合いをしたか発表する。

子どもを主体とした保育を実践されており、保育者が一方的に教えたりしていくのではなく、能動的な学習をする事で、受け身でない学びを目指しており、身につけたものを活用して、問題を解決したり、自分の考えを発言したり、仲間の意見を聞く事で、考える力を伸ばしていけるように指導されている様子が、よくわかりました。

また、SSTカードを使用し、社会的なマナーやルールについても子ども主体で意見を出し合い、自ら気付いたり考えたりして、自発的に活動する力をつけていく様子を学ばせて頂きました。

常に目標を明確にし、具体的にどのように活動するかを計画立てて保育を進めておられる取り組みを見習っていきたく感じさせて頂いた発表でした。

鴻池学園幼稚園（大阪府東大阪市）

発表者：槻谷歩 宮代美波

年中編：単元⑤ゆうえんち

目標：数の合成・分解

ねらい：5の構造を分解したり合成したりして、5はいろいろな数に分けられたり、組み合わせられていることに気づかせ、5の性質について理解する。



皆でサンタクロースに会いに行く設定で、道中に様々な乗り物が登場し、5人のグループの子どもがどのように分かれるかを考えていく楽しい教材を発表して頂きました。島へ行く為に船2に5人が分かれて乗る方法を考え、どのように分かれたのか数字カードを船にはり確認しました。様々な分け方があることに気づき、元にもどすと「5」になる事をその都度声かけし、確認していました。次にジャングルに進む為に車を3用意し、5人が3の車に分かれて乗る色々な方法を考えました。駅に着き、電車が4出てきて、5人が4の電車に分かれて乗る方法を考え乗車した後、サンタの街に到着し、ソリ5に5人が乗る方法を考えました。その都度整理シートを使って、5がどのような分け方ができたのかを一つ一つ確認し、「分けた数を合わせるといくつ？」というように全体数をまず分解してから、合成できるように指導されていました。

また応用で、2種類の具体物（あめ玉）を使って、合成分解をしながら、子ども達の保存性の発達についての実験を見せて頂きました。年少・年中・年長の成長発達の違いが明らかで、年長児では今までの教材操作経験の積み重ねにより、数の保存性を獲得している様子がよ



ピアジェ研究所

学校法人 鴻池学園第3幼稚園敷
地内

〒573-0104

大阪府枚方市長尾播磨谷1-4051

Tel 072(855)3777

Copyright(c) 日本ピアジェ会.,Ltd. All rights reserved.